ブータンミュージアム通信 vol. 17

■目　次

2　第７次訪ブータン団レポート　野坂弦司
5　ブータンから学ぶ「幸福」のあり方　佐々井 司
8　ブータンの観光　カルチュング・ワンチュク
13　日本で私の感じたこと　チェドン
17　眞子様のブータン訪問について
29　ブータンの民話について　栗原哲朗
31　最近のクェンセルの記事から、その Ⅳ
ブータンミュージアム　奥村彰二
36　アジアの村を歩く⑰　松田宗一
38　編集後記

ブータンミュージアム前理事長夫妻とブータン王国枢密院リョンポ・C・ドルジ氏　ティンプーにて

第７次訪ブータン団レポート

前理事長　野坂　弦司

ブータン訪問から帰って

7 回目のブータン王国訪問（7 月 10 日～ 16 日）より帰りました。今回はたくさんのサプライズがありました。

まず第１は越前市稲寄の森家のお嬢様と 10 年ぶりに全く何の前ぶれもなく私が主催した「福井県の夕べ」の客の１人として参加され、お会いしました。彼女の曽祖父は貴族院議員、祖父は武生市長、父は福井県総務部長でした。旧家で立派な江戸末期の本宅、特に長屋門が本多家からの移築のものというので、福井大学建築学部の協力の下、解体し私が約十年間預かり移築先を捜しておりました。未だに移築先が見つからずにおりました。再会を期して更に移築先を決定するよう努力するつもりです。ご協力下さい。

次のサプライズは、五代国王から木彫で飾られたテーブルを私達のブータンミュージアムへ展示品のご寄贈をいただいたことです。とても大きく、重いので、国王代理のレンポ・Ｃ・ドルジさんと私とでも持てず３人でやっと持てたすばらしいものです。

更に３つ目のサプライズは、若い女性が突然あらわれたことです。キラを着て正装です。私は一目見て以前会ったことのあるような気がしましたが思い出せません。前日国王の秘書に会った時、私の名刺を見てこの女性は日本人かと問われました。私は 10 年前に私の友人がブータンで撮ったものだと説明したのをやっと思い出しました。五年来捜していた私達のマスコットガールです。23 才大学生、彼女の名はソナムチョキ。日本語が話せないので急遽日本語の特訓を受けてもらい、今年の暮れに日本へ招待することにしました。いずれ福井の皆さんにとってもブータン王国を象徴する女性となってくれることを期待しています。

成果

① 11 月にブータン王国で開かれる予定のＧＮＨ会議はビジネス関連のものです。ＧＮＨ思想をビジネスの世界にも広げてブータンの国是が世界の多くの国々のビジネス世界を変えていくことを願って開くとのことです。私達二人に代わって月原理事長を招待していただくよう、頼みました。私の提案として､「ブータン研究センター（ＣＢＳ）が応募してくる世界の企業の中からＧＮＨ思想の実現度を審査し、その中からファイブスターやスリースターなどの認証を行っていただきたいと考えております。ゆくゆくは新しいノーベル賞に匹敵する重要な権威を持つものに育ててほしいと私は願っております。

②ブータンミュージアム イン ティンプーの建設

レンポ・Ｃ・ドルジ（78 才で今なお枢密院議長の要職にある）から誰かよい設計者を紹介してくれないかとのこと。首都ティンプーの郊外に約８エーカーの土地を確保したとのこと。カルマウラはＣ・ドルジの案ではなく第４代国王の意思だと思うとのこと。まだ表面下の動きなので、誰の設計が一番ふさわしいのか悩ましいところではあるが、恐竜博物館のように最新式の映像や音声を駆使したものを希望しており、人が案内する私達のブータンミュージアムの方式でなく、観客が自由に歩きまわり、案内の人手をかけないものを希望しているようだ。これまでブータン内務省で働

かれておられた向井純子さんが福井に帰国しており、彼女に相談してみようと思う。外観はブータン風、内部は近代的とのこと。織物博物館が大増築中だったのでＪＩＣＡの支援を求めることになると思われる。外観のデザインは向井純子さんと協力し、内部や全体設計のスケッチを描くことはセンボー建築事務所と福井都市開発が行うことを提案しようと思っております。ＲＩＡが国土全体のプランづくりに人を出しているが、個々の建物には手を出さないと思う。ＪＩＣＡ本部の松本審議役とＪＩＣＡ北陸 仁田支部長と相談しながら進めたい。

③福井の介護士養成学校へのブータン人学生の受入について。

労働大臣と教育大臣と二つの派遣元があります。労働大臣は年間 100 人は可能とのこと。今年は既に日本に 60 人 +15 人が決定しました。次がほしい場合は３つの条件が折り合えばよいとのこと。

１．研修期間
２．研修後の就職期間
３．そしてそれぞれの年間の支出と収入

上記の三つの条件を勘案し折り合えば理事長、校長など決定権のある人と会いたいとのこと。青木ツーリズム社長夫人が進めている。看護などの業務の研修は労働省でなく教育省が分担する。その場合はカルマウラ経由でＯＫ。条件はまだつめていません。

④タラヤナ財団との関係強化

今回はブータンミュージアム内のブータングッズの仕入を、タラヤナ財団の展示即売所が充実してきたので、殆どをここから仕入れすることにした。品質はよく市中より大分安いので有難い。今後の仕入はメールで簡単に出来るのでこれからが楽しみだ。ブータンの開発スピードはとても早い。地方からティンプーへ押しよせる若者が多く、国立大学への入学は随分難しいようだ。私立大学の授業料は高いが親子兄弟が助け合って費用負担をしているので私立大学への進学意欲も高い。ペルキルスクールをはじめ私立の諸学校が増加しているが、これらには高い授業料を支払う覚悟をしないと入学できない。

⑤トプケイ首相と首相官邸で会談

民間交流の大切さを互いに認識し、交流促進、自動車急増に対する対応について懇談、アドバイスをする。

今夏また若いブータン政府職員 12 名の２週間の研修について協力する。

3 年前に 11 名２週間、福井で行った実績がありましたが継続して両国の交流・友好促進に尽力することを伝えました。

眞子さまのご訪問の直後だったので首都のティンプーは日本ブームがさめやらず、私達も大歓迎を受けました。

眞子さま関係の写真はブータンサイドからご提供下さいました。

第５代国王からブータンミュージアムへのご下賜のテーブル

私達より第５代国王と王妃へ越前焼茶碗
（五島哲先生作、清川メッキにより純金メッキ付）２個を献上

ブータンから学ぶ「幸福」のあり方

福井県立大学 地域経済研究所　佐々井　司

私は現在、「福井の幸福度と人口動向に関する定量的研究」という調査研究を、福井県立大学・地域経済研究所を拠点に進めています。簡単に申し上げると、”幸福度日本一の福井県が真に幸福の地になるにはどうすればいいのだろうか？”ということを考察するものです。昨年から本格的に取り組み始めたものの、研究者の端くれが手を出すには極めて烏滸（おこ）がましいテーマであることは自覚しています。それでも、この福井県では誰かが（犠牲者となって？）思い切って乗り出さないといけない作業だと確信しているので、温かく見守っていただけると幸いです。

さて、具体的にどのようなことをやっているかというと、未ださほど大それたことをやっているわけではないので、胸を張ってご紹介できることはあまり無いのですが、現時点で皆さんと共有できることを多少なりともこの場を借りて記しておきたいと思います。

○福井でなぜ幸福研究が有意義なのか

皆さんもご存じの通り、『ふくい創生・人口減少対策戦略』（2015 年 10 月策定）では、“福井の有する「幸福」を人口問題の解決の新たな原動力にする”ことが戦略の冒頭に掲げられています。その背景には、これまでに公表された日本国内の「幸福度」ランキングで、福井県が 47 都道府県中 1 位であることが挙げられます。

幸福度に関する研究は国際的に実施されており、日本国内でも少なくない先行研究の実績があります。しかしながら同時に、課題も多く指摘されています。「幸福度」を測定するうえで用いられている数十項目に及ぶ構成指標が真に「幸福度」を代表するものなのか否か、また、異なる時代、異なる地域においても普遍性を担保した指標なのか、という議論は依然続いています。また、地域別に観測される幸福度と人口動態との関係が一般的に予測されるものと必ずしも一致していることなどから、幸福度指標の客観性には改善の余地が残されています。このような現状のもと、福井県が国内の幸福度で今後も上位を維持することの戦略上の重要性を考えても、幸福度日本一とされる福井県を拠点として地方創生に繋がる幸福度に関する学術的研究を実践することの意義は極めて大きいのではないでしょうか。

○２つの「幸福」

とは言え、「幸福」は学術的に哲学に端を発する伝統を持つこともあり、現代の社会科学（社会学や経済学等）で捉えようという試みはかなりの冒険です。一方で、現代人の考えつくことは極めて単純で、「幸福」を２つの方向から分析してきました。

１つ目は、“客観的幸福度”による考察です。福井が幸福日本一を謳う根拠として引用されることの多い寺島実郎・日本総合研究所『全 47 都道府県幸福度ランキング』では、各都道府県に関して「基本指標（人口増加率、一人あたり県民所得、国政選挙投票率、食糧自給率、財政健全度）」、ならびに「健康（医療・福祉、運動・体力）」「文化（余暇・娯楽、国際）」「仕事（雇用、企業）」「生活（個人・家族、地域）」「教育（学校、社会）」等の６分野（12 領域）における合計 65 指標についてそれぞれランキングしたうえで、総合得点を比較しています。“客観的指標”に基づくランキングの課題はすでに少なからず指摘されています。どのような指標を選択するのか、指標化できる統計の有無、

「人口一人あたり」の妥当性、各指標ランキングのポイント化の方法（例えば、等価あるいは加重平均いずれが妥当なのか）等、条件次第でランキングは変わります。また、各指標を等価に扱うランキングに顕著な課題としては、因果関係や相関関係に多重共線性を持つ可能性のある複数の指標が同時に用いられていることによるランキングへの影響です。これらの課題を解消するのは極めて難しく、考察者側のリテラシーが問われるといえます。ちなみに、国際的にも“客観的指標”に基づく幸福度ランキングは少なからず行われており、国連と米コロンビア大学が設立した「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク（SDSN）」は、157カ国を対象に、一人当たりの国内総生産（GDP）、社会的支援、健康寿命、社会的自由、寛容さ、汚職の無さなど、6要素を指標化し「World Happiness Report（世界幸福度報告書）」を公表しています。

２つ目は、“主観的幸福観”による評価です。経済協力開発機構（OECD）は近年、従来の“客観的指標”に基づく国際比較に加えて、“主観的幸福観”をターゲットにした測定方法の開発に注力しています。“OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-Being”(日本語版は主観的幸福を測る)ではその詳細が紹介されています。その他、国際諸機関で行われている近年の幸福研究は、“主観的幸福観”が個人属性や環境条件によってどのように異なっているのかに関する定量分析の結果をもとに国際比較するものが主流です。“How's Life? MEASURING WELL-BEING”（日本語版はOECD幸福度白書）はその代表的な試みです。日本でも前野隆司・慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネージメント研究科委員長・教授をはじめとして、“主観的幸福観”に基づく調査研究が注目され始めています。なお、この“主観”による幸福ランキングは“客観”指標によるそれとはまったく異なる結果になっています。（株）ブランド総合研究所による『地域ブランド調査（都道府県魅力度）』をはじめ、民間シンクタンク等が実施するランキングにおいて福井県が上位に入るのはこれまでのところ難しいのが現状です。

○ブータンから学ぶ「幸福」のあり方

今回の調査研究ではブータン王国の「国民総幸福（GNH：Gross National Happiness）」を取り巻く議論について詳細なレビューを行い、福井県が「幸福」をテーマとして生活環境の整備を展開する際に留意すべき知見を得たいと考えています。GNHを構成する９つの領域（Nine Domains）、すなわち①居住・生活水準、②教育、③健康、④環境、⑤コミュニティ、⑥時間の使い方、⑦心の安寧、⑧統治の在り方、⑨文化の多様性と発展、における地域住民による評価を国政は重視しており、これら各領域における環境整備を、(1) Good Governance、(2) Sustainable Socio-economic Development、(3) Preservation and Promotion of Culture、(4) Environmental Conservation、という４つの柱（Four Pillars）を理念として進めていることは、本通信の読者の方々であれば当然ご存知でしょう。ただし、ブータンのGNHは福井県が政策的に依拠する幸福度とは根本的に異質です。

そもそもブータンは自国の幸福度を競っていません。上でご紹介したOECDの国別幸福ランキングでもブータンは決して高い順位にはありません（日本の順位の低さもかなりのものですが）。順位というのは所詮、一時の自己満足のようなものなのです。スポーツ等の記録と同じでいつかは順位が入れ替わります。今は１位であっても時代が変わり条件や環境等が変化すればいつかはその座から陥落します。良いに越したことはありませんし、戦略的にうまく利用することでPRにもなり知名度を上げることに一役買うことになるでしょう。しかし、本当に重要なのはそこで暮らす

人々が本当に幸福観に満たされているか否かではないでしょうか。

ブータンのGNHは私たち一人一人が日々の生活のなかで、時に立ち止まって内省しなければいけない９つの指標を掲げているように思います。決して”こう在らねばならない”という指針ではありません。そして４つの柱は、９つの指標をもとに生きる国民を支えるうえで、行政が堅持すべきミッションだと思います。福井が長期的に目指す「幸福」がブータンの意味するところの「幸福」であって欲しいと、個人的には期待しているところです。引き続き現行の調査研究を深化させ、さらに皆さんと有意義な議論ができればと考えています。

佐々井　司
福井県立大学 地域経済研究所
1966年大阪生まれ
神戸大学大学院工学研究科修了
1994年より厚生労働省 人口問題研究所（現在の国立社会保障・人口問題研究所）に研究職として配属
2015年4月より現職

ブータンの観光

ローメンツアーズ＆トレッキング　カルチュング・ワンチュク

何世紀にもわたる、自ら選んだ孤立を経て、秘境の桃源郷と言われるブータンは、第４代ブータン国王の戴冠式直後に、世界に門戸を開きました。４６，５００平方キロの面積のブータンは、東ヒマラヤ山脈の斜面にあり、北にチベット、西にインド・シッキム地方、南にインド・アッサム地方、東にインド・アルナチャル・プラデシュ地方に囲まれています。

ドチュラ岬の仏塔

ブータンの多彩な国民は主に３つの民族集団から成っています。シャルチョプス族は同国での最も早い居住民と考えられており、同国東部を占めています。彼らはモンゴロイド起源の出だと言われています。ンガロプス族は９世紀ごろ同国に来て、西部に住みついたチベットからの移民です。同国南部地域には、２，３世紀前にここに移住したネパール系住民が住んでいます。

ブータンの国教は、マハヤナ仏教の１宗派であるカギュパの中のドリュクパ派です。仏教はブータンの歴史、ならびに仏教への厚い信仰心が生活様式に深く反映されている国民の生活において重要な役割を果たしてきました。宗教上の記念碑や象徴は、人が多く住む谷間から遠い山岳地帯まで国の至る所に見られます。

ツッチュ祭

ブータンの美術工芸は、長年にわたる外部との隔絶の中で成熟してきました。それらは、いろんな表現手段で､形の単純明快さを表現していますが、それでいて、装飾においてきわめて深みのある表現をしています。ゾンとよばれる城郭建築物は設計図なしに造られてきました｡緩やかに尖った壁、古典的な線、大きな庭園や美しいギャラリーはブータン建築の素晴らしい代表例です。さらに多様な動植物がブータンを美しく飾ります。国中で行われる年中行事の宗教的なお祭りの時期には、まさにゾンは生き生きとしています。

プナカゾン

ブータンでの観光産業をまさに開始した時から、王国政府はその産業を民間にさせることなく、直接、経営し監視してきました。全体的な発展が急速に見られるようになるにつれて、また、官と民

オグロヅル

の両方のセクターの全体的なバランスを持ち続けながら、活動をさらに活発化するため、ブータン王立政府は民間に観光業を営む許可を与えました。同政府は１９９１年に観光産業を民営化しました。そして、今日、同政府は既に１５００から２０００事業者に文化及びトレッキングの両方の観光業務を扱えるライセンスを発行しました。１５００から２０００のライセンス所持者のうち、ほんのおよそ７００から７５０の事業者しか活発に活動していません。観光客はちょっとした一地域の旅行者も含めて年々増えています。これら多くの同業者の中に、私の旅行会社も、文化やトレッキングを目的として訪れる旅行者のニーズに十分対応できる業者のひとつとしてあり、独自のやり方で旅行を促進するための十分な経験とアイデアを持っています。

ゴールデンラングーン

これまで厚かった旅行者の記録を整理すると、多くの旅行者は普通文化的な観光をするためにやってきており、トレッキングの旅行者はここ数年減ってきていると言えます。文化的な観光とトレッキングの観光を均衡させるためには、トレッキング・ルートを注意を払いながら整備する必要があるように感じられます。つまり、以前からあるルートはさらに改善や維持に努めるとともに、新たなルートをさらに整備する必要もあるように感じています。その際､自然を阻害することなく、また、環境に優しい適切なガイドラインを持つ必要があります。もちろん、トレッキングは人々にブータンを見てもらうひとつの方法です。というのは、トレッキング・ルーツは深い森の中や峠を抜けていくので、いろんなレベルの能力や体力を身につけさせてくれます。全方位見渡せるような

タイワンオナガ

景色に感嘆したり、時には野生の動物や天国のような土地に惜しみなく咲き誇る野生の花に遭遇し、自然を間近に感じさせてくれます。ブータンでは、トレッキングをする地域は、全く異なり、スリルに溢れ、他のどの国々も比べ物になりません。トレッキングをする際には､我々旅行業者は､食料、食材を運ぶ動物、睡眠をとるためのテント、食事用テント、トイレ用テント、マットレス、トレッキングガイド、料理人、アシスタントなどを提供しますが、寝袋だけは貸し出すのはお薦めできないので、自分のものを持参されるよう推奨しております。

また、さらに旅行者の選択により、また、さらに面白く思い出となる経験をするため、ブータンの首都ティンプーから車で約３時間のところにある

黄色の冠鳥　サイチョウ

ブータンの古都プナカでは、渓流下りも可能です。また、バードウオッチング（野鳥観察）や一地域に腰を落ち着けたエコツーリズムも可能です。

世界中で新たな（旅行商品開発の）取り組みがなされる中にあって、ブータンを旅行先とする昔からある同じような（代わり映えのしない）旅行商品を売ることを避けるために、ブータン観光協議会や関係機関は国内外からの旅行者を増やすために新たな旅行商品を開発する努力をすべきだと思います。同時に、同協議会は、観光産業のためのインフラ、中でも、その土地土地の人々や、またその地を訪れる旅行者を楽しませる癒しのログハウス的な設備や、幹線道路沿いに清潔なトイレなどを整備する必要性も感じます。もし、このような設備を整備することができたら、訪れる旅行者や、幹線道路を普段行き来している一般の土地の人々の不便を和らげることができますし、さらに、こうした設備を管理している土地の人々は、それらの設備の利用者からわずかな使用料をいただくことにより、生計を立てる機会を得ることができるでしょう。

プナカゾン

全体的に見ると、ブータンは海外から来られる旅行者に見ていただきたい素朴な自然があり、そこには豊かな文化、建築物、伝統、動植物が見られ、また、旅行者は独特の文化遺産や織物、そして国のあちこちで見ら得るスペクタクルな仮面舞踏やお祭りを経験することもできます。ブータンには、バンコク、デリー、コルカタ（＊カルカッタ）、

ツェチュ祭

カトマンズ、ガウハティ（＊インド・アッサム地方）、ダッカ、シンガポールから飛行機で来れます。現在、ブータンには２つの航空会社があります。毎日運航しているドウリュック航空とブータン航空です。ドウリュック航空には、ブムタン、ヨンプラ、ゲレプへの国内便の運航もあります。将来的には、ドウリュック航空は日本、香港、そしてドバイへの路線も計画しています。これらの取り組みにより、ブータン観光協議会やその他関係機関が上記で提案したような取り組みにおいて重要な役割を果たすならば、年とともに、間違いなく海外からの旅行者が増えるものと確信します。

タシ・デレ（ご多幸を）

■プロフィール
カルチュング・ワンチュク
首都ティンプーで旅行会社（ローメンツアーズ＆トレッキング）を経営　2017 年来福

Tourism in Bhutan

After centuries of self-imposed isolation Bhutan the hidden Shangrila opened its doors to the outside world in 1974 immediately after the coronation of 4th King of Bhutan. Bhutan with an area of 46,500 sq km is located on the slopes of the eastern Himalayas between Tibet in the north and the Indian states of Sikkim in the west, Assam in the south and Arunachal Pradesh in the east.

The colorful people of Bhutan are mainly of three ethnic groups. The Sharshops (Sharchops) are believed to be the earliest inhabitants of the country and occupy the eastern region. They are said to be of Mongoloid origin. The Ngalops are the Tibetan immigrants who came to Bhutan around the ninth century and settled in the west. The southern region of the country is inhabited by the Nepalese who settled here few centuries ago.

The state religion of Bhutan is the Drukpa sect of Kagyupa a branch of Mahayana Buddhism. Buddhism has played a vital role in shaping the history of the nation and the life of its people whose deep faith in this religion is clearly reflected in their way of life. Religious monuments and symbols can be seen throughout Bhutan from densely populated valley to the remote mountains.

Bhutanese Arts and Craft have matured over the years of isolation. They express simplicity of form in every medium and yet show great depth of expression in ornamentation. The castle like Dzongs have been built without plans, their gently tapering walls, classic lines, large court yards and beautiful galleries of are fine example of Bhutanese architecture. Further varies species of flora and fauna adorn the country beautifully. Actually Dzongs come to life at the time of religious festivals held annually throughout the country.

From the very inception of Tourism in Bhutan, the Royal Government has run and monitored its Industry directly without letting the private sector to run. As the overall development take place rapidly and to further strengthen its activities keeping to have overall balance both the Government and Private Sector as a whole, the Royal Government of Bhutan has given the privilege allowing the Private Sector to run the Tourism keeping the trend as "High Value & Low volume/Impact". The Government has privatized the Tourism Industry in the year 1991 and today the Government in total has already issued 1500-2000 licenses (approximately) to handle the tourists both Culture and Trekking. From the overall 1500-2000 license holders (approximately) only 700-750 Operators actively play its role yet the arrival of tourists increases yearly including the Regional Tourists. And out of this many Stake Holders, LHOMEN TOURS & TREKKING is also one of them efficiently catering its need to the visiting tourists both Culture & Trekking having vast experience and ideas to promote Tourism in a unique way.

While checking the record, it is noted that most of the clients usually comes to do the cultural sightseeing and the trekking has declined over the years. In order to balance both Culturally & Trekking, it is felt essential to the stake holders to carefully try to promote its trekking routes i.e. improve/maintain the old route and to further promote more new trekking routes without disturbing its nature and environmentally friendly having proper guideline. Of course trekking is another way to make the people see Bhutan as the trek routes are through dense forests and over mountain passes which offer almost all levels of ability and fitness while one marvel at the panoramic views and sometimes encountered with wildlife and the lavish flora in the paradise land bring the clients close to nature. In Bhutan the trekking terrain is completely different and adventurous where it cannot be comparable to any other countries. During the trek, we provide food, animal transport to carry the foodstuff, sleeping tent, mess tent, toilet tent, mattress, trekking guide, trekking cook, trek assistant etc. except the sleeping bag which always recommend to bring on their own for it is not advisable to issue. Also in addi-

tion, depending on the clients choice and to have more interesting/memorable experience, a rafting is also possible in the old capital of Bhutan 'PUNAKHA" which is about 3 hours drive from capital city of Bhutan "THIMPHU". Further, Bird watching Tour and Community based Ecotourism is also available.

With the growing challenges round the globe and to avoid selling the same old products where many clients particularly those who (Agents) sales Bhutan as a destination recommends that the Tourism Council of Bhutan and Stake Holders should try to look for the new products in order to increase of its arrival both Internationally and Regionally. At the same time, it is also felt essential for the Tourism Council of Bhutan to improve the infrastructure specially a very clean toilets facilities on the highway along with a refreshment house(log cabin type) for it can entertain both locally and for the visiting tourists. If we have this facilities it can ease the difficulties of the visiting tourists and also to our public as a whole traveling regularly on this highway which again the local community may get opportunity to earn their livelihood making them to take care of this facilities by charging nominal fees to the users.

Overall Bhutan do have a pristine nature to show to the outside world with its rich culture, architect, tradition, Flora & Fauna where visitors can also experience the unique cultural heritage, textile with spectacular mask dances and festivals throughout the country. Bhutan can be reached by air from Bangkok, Delhi, Calcutta, Kathmandu, Gauhati, Dhaka and also from Singapore. Right now Bhutan has two Airlines "Druk Airline & Bhutan Airline" which operates daily. Druk Air also operates within the Country to Bumthang, Younphula and to Gelephug. In future Druk Air has the proposal of flying to Japan, Hong Kong and to Dubai. With this over the years I am sure there will be an increase of the international arrivals without any doubt if the Tourism Council of Bhutan along with the Stake Holders consider in playing a vital role as recommended/suggested.

TASHI-DE-LEK
KARCHUNG WANGCHUK
LHOMEN TOURS & TREKKING

POST BOX NO.341

OPPST. CLOCK TOWER

THIMPHU:BHUTAN

Email: Lhomen@druknet.bt , www.lhomen@gmail.com
Web:www.lhomen.com.bt

タクツァン僧院

日本で私の感じたこと

福井大学 教職大学院留学生　チェドン

私にとって、新しい事を見たり経験したりすることはいつもわくわくします。新しい場所には必ず、探究心をくすぐる新しい何かがあり、新たな価値観が学べます。とても美しく、高度に発展した国日本は、私のような初心者に特に、多くの新たな価値観を示してくれます。実際、東京の完璧な高層ビルを見た一方で、福井のように静かで上品でローカルな地域を見たりすると大きな驚きを感じるのは、私がこのように高度に発展した国を訪れたり、留学したりするのは初めてだからだろうと思います。ということで、今回は日本での旅で経験したこと、初めて私が経験したこと、私が目にした文化の違いのいくつかを皆さんにお伝えしたいと思います。

日本到着までの旅は思ったほど簡単ではありませんでした。私のこれまでの人生で一番長い旅路のひとつだと思います。とても大変でしたが、日本のような場所を訪れるという興奮は、全ての面倒を打ち負かしてくれるものです。入国した時の喜びは大変なもので、私は一生忘れないことでしょう。

最初に面白いなと思ったものは公共交通機関でした。完璧なスケジュールで運営されていてとても便利です。バスや電車は多くの人で大混雑でしたが、車内はいつも静かで、利用客はみんなお互いの快適さをとても尊重しているので、ぎゅうぎゅう詰めの状態で旅をしているとは感じません。何百万人もの人々が公共交通機関を利用している東京のような都市でも、電車が駅に到着すると、ホームで列を作って待っていた客がお互いにぶつからないように気をつけて乗り降りしています。それは本当にすばらしかったです。優先座席は常に配慮されていて、年配者、妊婦、身体障害者などの席をより必要としている利用者用に設けられています。この習慣は、特に年配者に敬意を払うという点では母国のブータンを私に思い起こさせます。

交通機関は非常に自動化されており、利用客は殆ど言葉を交わす必要がありません。停車のアナウンスはタイミング良く流れ、路線地図はあちらこちらで表示されていて、利用客は降りる停留所の手前でボタンを押すだけでいいのです。一方ブータンでは、“運転手さん、すみませんが、停めていただけますか？目的地に到着しましたので”と大声で叫ばなければなりません。それは人間と技術によるつながりではなく、人と人とのつながりなのです。

私は、日本では、いろいろな進んだ物質的な物が容易に手に入るため、人々同士がお互いに会話をする機会が減少するのではと感じました。人々はみな独立していて、小さなペットボトルの飲み物一つを買うような事でさえ、近くの自販機で手に入るのですから。少し歩けば欲しいものが手に入るのです。ですから、会話は全く必要ありません。

日本は賞賛に値する独自性に富む文化を持っています。社会的習慣であるお辞儀、玄関で靴を脱ぐときの靴の向き、皆に礼儀正しくある事など。これらはどれも小さなことだけれど、良い社会を作るのに重要なことなのだと感じます。だから日本はこんなにすばらしいのです。

日本の伝統的な家は美しく、紙製のパーテーション(障子)はとても芸術的です。そうした家々には日本庭園があり、人工的な池が作られ、様々な木が植えられています。この光景を見て、自然の重要性は高い意識で受け継がれているのだと感

じました。

もうひとつすばらしいと感じたことは、ゴミ処理です。ゴミの分別処理については本当にすごいと思いました。様々な種類の空瓶やゴミが、種類によって別々のコンテナに分別されて捨てられるのを見てショックを受けました。母国のゴミ処理問題の改善のために、帰国したら是非友人とこの情報を共有したいと思っています。

また、私はこれまで日本では、春を一番エンジョイしました。何といっても桜の開花がすばらしいからです。日本の桜を自分の目で見るのは私の長年の夢の一つだったので、実際に見たときは大きな喜びで胸が一杯になりました。たくさん写真を撮っている瞬間の感覚でさえ、今も新鮮に記憶に残っています。そして、人々が私と同じようにこの季節を楽しんでいるのを見て、よりうれしかったです。この季節は家族、友達、恋人たちに日常の忙しさから少しでも抜け出し、みんな集う時間をもたらしているのだと感じました。

冬の間はとても寒くて、夏を心待ちにしていました。私にとって夏が一番いい季節だろうと思っていたのですが、大きな間違いでした。蒸し暑く、気温の上下が激しい、今までで一番つらい夏をすごしています。母国では大抵、冬に寒さが厳しくなりますが、夏は快適な気温でとても過ごしやすい季節となります。ですから、日本で今経験している夏はとても異なった夏なのです。

ともあれ、私はここが大好きです。豊かな文化に触れ、すばらしい経験をいろいろとさせてもらっているここが大好きで、さらに、これからも滞在中にいろいろな場所を探検し、いろいろな体験ができると思うとわくわくしてきます。

チェドン

（注・日本語訳はブータンミュージアム事務局）

■プロフィール
チェドン
ブータンの学校教員
現在、福井大学教職大学院で来年の３月までの１年半教員指導法の勉強中

My Thoughts About Japan

Seeing and experiencing new things has always been a fascination for me. New places definitely have something new to be explored and to learn new values from. Japan, a very beautiful and advanced country, has got a lot of different and new values, especially for a basic learner like me. In fact, it's my first time to get the chance to travel and study in such an advanced country, and this must be the reason for my surprise at seeing the wide range of sights from the tall, immaculate buildings of Tokyo to the quiet, elegant, rural places like Fukui. In this article, I will try to share some of my travelling experiences in Japan, some of the new things I have experienced, and some cultural differences I have observed.

My journey to Japan wasn't as easy as I'd thought. It must be one of the longest journeys that I have travelled in my lifetime. It was tough; however, the excitement of getting to a place like Japan surpasses the trouble it takes. It was such a great moment for me to arrive, and this is a memory I will never forget.

The very first thing that amused me was the public transportation. It's so convenient, with perfect timing. Though the buses and trains are packed with lots of passengers, you never feel like you are travelling in a cramped transportation mode because it's totally silent, and all the passengers respect each other's comfort so much. The moment the train arrives, everyone who wishes to board that train forms a queue, and then everyone makes sure they do not bump into each other, even in a crowded city like Tokyo, where millions of people use the public transportation. That was really amazing! The priority seats are always respected. They are offered to the passengers who most need them: senior citizens, pregnant women, differently-abled people, and so on. This habit also reminded me of my home in Bhutan, especially the respect for senior citizens.

The transportation systems are so mechanized that the passengers hardly need to converse with each other. The announcements about stops are timely, maps are available everywhere, and the passengers just need to press a button to stop the bus. Conversely, back home, we call aloud Aue Atse Guena, Nga nalay thoenee la, which literally means, "Brother, will you be so kind enough to stop? I reached my destination." It's all about human-to-human connections, rather than human-to-technology connections.

I feel that the wide availability of advanced materialistic things creates less need for the people here to talk with each other. People here are very independent. Even to purchase a very minor thing, like a small drink bottle, you only need to walk off to the nearest vending machine, and within a few steps, you can get what you desired. Thus, no talking is required.

Japan has a very appreciative, unique, rich culture, such as the social customs of bowing, leaving footwear facing outward in the doorway, and being polite to everyone. I like these customs because, although I feel they are only minor actions in themselves, they really mean a lot in terms of constructing and conserving a good society. Thus, it is no wonder why Japan is so wonderful.

The traditional houses are beautiful, and the paper partitions are artistic. I saw most residents of such houses surrounded by artificial ponds and varieties of beautiful plants. This scene made me feel that the importance of nature is highly preserved, too.

Another amazing thing is the waste management. The segregation of waste is awesome. I was shocked to see the numbers of different waste bins, allocating different kinds of waste into separate waste containers. I really wish to share about this experience with my friends back home for the betterment of our waste management.

Additionally, I have enjoyed spring season the most. It's all due to the sakura blooming. To see these cherry blossoms in reality was one of my dreams since a long time back, and seeing the thing you had wished to see so much brings immense joy. Those moments spent taking a lot of pictures still linger fresh in my mind. Moreover, I was glad to see many other people enjoying the cherry blossoms as much as I was during that season. I thought this season brings family, friends and loved ones together, out of the busy schedules of their lives, though only for a short time.

During the winter season, I wished so much for the summer season since winter was too cold. I thought summer would be the perfect season for me, but I was wrong. I am experiencing the hardest summer ever: very high humidity, with temperatures fluctuating so much. Usually, back home, if the winter is so cold, summer would be a nice season with moderate temperatures, but the summer that I am experiencing here is quite different.

All in all, I love this place: all the rich culture and the amazing experiences. I am excited to think that I am still yet to explore some more places and have further experiences during my stay here.

By Chedon

眞子さまのブータン訪問について
２０１７年６月１日～６月７日

１日…パロ、からティンプー（首都）へ

・午前、パロ国際空港到着（シンガポール経由）…国王の妹君アジ・ユーフェルマ王女がお出迎
・午後、民族伝統博物館訪問

２日…ティンプー（首都）にて

・タシチョゾン…国王陛下夫妻を表敬訪問、リンカナ宮殿にて昼食会
　午後、ナムゲル王子とご一緒に宮殿の庭園を散策
・時計塔広場にて、日本週間の開会式に参列。ブータンの若者による柔道や空手の披露、ブータンの小学生による日本の歌の合唱の様子をご覧になる。
・平松賢司駐インド大使（ブータンも兼轄）主催の晩餐会に参列

３日…ティンプー（首都）にて

・チャンリミタン・スタジアム…ブータンの伝統的な国技のアーチェリーを体験
・王立織物博物館の見学
・ブータンに派遣されている JICA・青年海外協力隊員を激励

４日…ティンプーからパロへ

・メモリアル・チョルテンにて「花の博覧会」の開会式に参列
・キチュ・ラカンを参拝（パロ）

５日…パロ

・故西岡京治（ブータン農業の父）を記念するチョルテンを視察
・ブータンの伝統的な農家をご訪問
・パロ・ゾン、および国立博物館をご見学

６日…パロ

・タクツァン僧院へトレッキングし参拝

７日…パロ

・朝、パロ国際空港より帰国へ

ティンプー

6 月 1 日　　パロ空港到着…国王の妹君のアジ・ユーフェルマ王女がお出迎え

（左）アジ・ユーフェルマ王女　（右）秋篠宮眞子さま

○パロ空港

パロ空港はブータンの首都ティンプーの西に位置するパロにある空港である。パロ市街から 3.7 マイル（6.0 ｋｍ）に位置するブータン唯一の国際空港であり、ドゥルク航空の本拠地である。この空港は高い山々に囲まれており、航空管制が無く、滑走路が短いため、離着陸の際はパイロットに高度な技術が要求される。有視界飛行方式で日出から日没までのみ飛行可能である。

パロ国際空港

6月1日　ティンプーの民族伝統博物館を視察される

○民族伝統博物館
古い農家を改修してブータンの田園生活を再現している。アラ（焼酎）の蒸留を再現したかまど、巨大な米びつ、伝統的なトイレなどを展示。建物だけでなく、庭園では伝統的な作物を栽培しており、付属のレストランで伝統料理を楽しむことが出来る。

6月2日　首都ティンプーにおいて在インド日本大使（ブータンも兼轄）平松大使により歓迎会が催された。1997年、ご両親である秋篠宮ご夫妻がブータンを訪問されており、この歓迎会で眞子さまは「ブータンを訪れるのが子どもの時からの夢でした。」とスピーチされ、また2011年にブータン国王と王妃が東日本大震災直後に国賓として来日されたことに感謝の意を表された。

ワンチュク国王を表敬後、タシチョゾンでの歓迎式典にご出席、近くのリンカナ宮殿で国王主催の昼食会。午後、ナムゲル王子とご一緒に宮殿の庭園を散策。

時計塔広場にて日本週間（日本を紹介する行事）のオープニング式典に参列（英語で挨拶）され、ブータンの若者による柔道や空手の披露や小学生による日本の歌の合唱の様子をご覧になる。在ブータン日本大使館平松大使主宰の晩餐会出席。

○タシチョゾン

国王、そして宗教界の最高指導者である大僧正ジェ・ケンポの座所であり、ブータンの政治、信仰の中心である。観光客の見学は就業時間以外に限られる。寺院でもあるため、日没後の女性の立ち入り禁止、ドレスコード（正装が必要）がある点は他のゾンと同じである。

建築物としてのタシチョゾンは何度も火災や地震による被害を受けている。1996 年にほとんどが大改修されたが、基本的にそれ以前の状態を再現する形をとり、建築技法も 18 世紀の建設時とほとんど変っていない。

６月３日　紀子さまに贈られた伝統衣装（キラ）で国立弓技場を訪れ、伝統の弓矢やダーツを体験。前国王主宰の昼食会に出席。男性用と女性用の民族衣装を贈られる。

○国立弓技場

○織物博物館

タージ・タシのすぐ北にあるガラス張りの吹き抜けが印象的な建物は王立織物学院で、市街北部の新たなランドマークとなっている。内部に織物博物館がある。古い王族の衣装などの収蔵品のほか、素材、柄の地域差などを解説するコーナーがある。伝統的な民族衣装が見られる。

6 月 4 日　メモリアルチョルテンにおいて開かれた「花の博覧会」の開会式に臨まれる。眞子さまは「庭で二国間の交流が図られている」と感心し、「ブータンの雰囲気もありつつ、日本の枯山水でブータンを表現されていて素晴らしい」と述べられた。

《花の博覧会》

この博覧会は、国王の発案により、2015 年に始まったもので、3 回目の 2017 年は、ブータンのティンプーにある国立祈祷仏塔（ナショナル・メモリアル・チョルテン）において、ブータン政府より招待を受けた秋篠宮眞子さまが主賓として主席された。福島県の造園家と日本の技術を学んだブータン人が、現地の植物を用いた日本庭園を展示した。

○国立祈祷仏塔（ナショナル・メモリアル・チョルテン）

ブータンの首都ティンプーの街のシンボルでもある白く大きな仏塔。1972 年に亡くなった第 3 代ジグミ・ドルジ・ワンチュク国王が生前に建立を企画し、没後の 1974 年に国家事業として第 3 代国王を記念する意味をこめてつくられた。今も参拝者は絶えることなく、ティンプー市民は学校や仕事に行く前にこの仏塔を訪れお参りをそして家に帰る時にも訪れてお参りをする。

ナショナル・メモリアル・チョルテン

6月4日　パロ・ゾン、ブータン最古の寺キチュ・ラカンを視察される

○パロ・ゾン

ブータン西部、パロ県の都市パロにある城。正式名称はリンプンゾン（「宝の山の城」の意）パロ川に臨む高台に位置する。17 世紀前半、建国の父と称されるシャブトゥン（ガワン＝ナムゲル）がチベットに対する防備とチベット仏教ドゥルック派の布教の拠点として建造。現在は県庁が所在し、仏教寺院、僧院として利用されている。

パロ・ゾン

○キチュ・ラカン

中央ブータンのブムタン地方にあるジャンペ・ラカンと共にブータン最古の寺院であるこのキチュ・ラカン。　当時チベット圏に大きな力を持っていた悪魔の力を抑えるために、７世紀に初めてチベットを統一したソンツェン・ガンポ王によって建てられたと言われている。王はその悪魔の体の１０８の場所に寺院を建立し仏教の布教に努めたそうで、このキチュ・ラカンはその悪魔の左足にあたる場所。

現在は特別許可を取得すれば内部の拝観が可能。お堂の内部には数多くの千手千眼十一面観音像が納められており、ご本尊正面の床には、１０００年以上の間人々が五体投地をして祈りを捧げてきたために出来た足の形のへこみが出来ている。ブータン人の信仰の篤さを実感させられる場所である。

キチュ・ラカン

6月5日　国立博物館を視察される

国立博物館

○タ・ゾン国立博物館

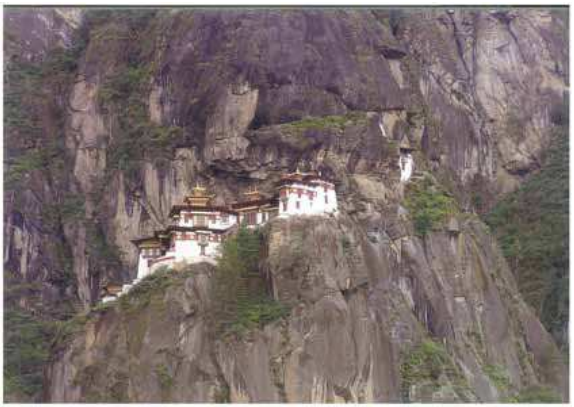
1649年に築城されたタ・ゾンが1968年に改築され、国立博物館として開館した。とてもユニークな形をした建物で円形の建物の上部から入場し下へ降りながら展示物を見学できるようになっている。貴重な仏画、仏像、世界的にも有名なブータンの切手、王族の民族衣装、ブータンに生息する動物の剥製、民具などが展示されており、ブータン文化とチベット仏教を詳しく学ぶことが出来る。現在は2009年、2011年地震による崩落のため横の仮建物で展示を行っている。

6月5日　故西岡京治氏の功績を顕彰する仏塔（記念館）を訪問

○西岡京治記念館・西岡チョルテン

ブータンにおいて、「農業の父」と呼ばれ農業近代化への貢献から外国人で初めてダショーの称号を授かった日本人、西岡京治氏の記念資料館が、パロにある農業機械センター（Agriculture Machinery Centre）内に2014年6月17日オープン。この資料館では、1960年代の西岡氏のブータンでの活動の様子を納めた貴重なフィルム映像や、農業に関する様々な書籍などが閲覧できる。また同センター敷地内に「西岡チョルテン（仏塔）」がある。日本語と英語とゾンカ語でその功績をたたえる文章が刻まれている。パロから半日で記念資料館と西岡チョルテンが観光できる。なお西岡京治資料館はＡＭＣ（農業機械センター）内に併設されており、見学には事前予約が必要。

６月６日　眞子さま、タクツァン寺院へハイキング



○タクツァン僧院
ブータン西部、パロ県の都市パロの北西郊にある僧院。名称は「虎の隠れ家」を意味し、切り立った岩山の断崖に位置する。8 世紀に高僧パドマサンババが３か月瞑想したという洞窟が近くにあり、同国有数の巡礼地として知られる。17 世紀末に僧院が建てられた。
参拝道は比較的整備されているが、標高 3000 mの山肌に位置しているため、たどり着くには山道を徒歩２～３時間かけて行くことになる。

タクツァン僧院を目指す眞子さま

民族伝統織物博物館を訪問

日本文化の紹介イベント
「日本週間２０１７」に臨む

「日本週間２０１７」のオープニング式典で
挨拶される眞子さま

ブータンの伝統的な弓の競技を体験

伝統美術工芸学院で仮面製作の様子を
見学される眞子さま

パロ・ゾンをご訪問

パロ国際空港から帰国の途につかれる眞子さま

眞子さまブータン訪問のご感想　全文

このたび、ブータン王国政府より「ブータン花の博覧会」へお招きいただき、ブータン王国を公式に訪問できましたことを誠に嬉しく思います。

昨年は日本とブータンの「外交関係樹立３０周年」という記念すべき年であり、両国の友好親善関係を深める、様々な行事が行われました。その余韻が残る中での訪問となり、多くの人々と交流を持つことができたことは、私にとって大きな喜びでした。このたびの訪問にあたり、国王王妃両陛下をはじめ王室の方々、ならびに政府関係者の様々なご配慮とブータン国民の心温まる歓迎に対し、心より感謝の気持ちを表します。

このたびの訪問では、首都ティンプーとパロの２箇所を訪れました。パロ国際空港へ降り立つ飛行機の窓よりヒマラヤ山脈を望み、緑あふれる景色を眼前にした瞬間を幾度も思い返します。

国王王妃両陛下には、お目にかかる機会をいただくとともに、ご家族での昼食会にもご招待いただきました。その席では、空港でお迎えくださったユーフェルマ王女殿下もご一緒に、楽しく和やかな雰囲気の一時を過ごしました。昨年お生まれになった王子殿下にもお目にかかりました。その翌日には、先代国王陛下にもお招きいただき、王母陛下方をはじめ王族の方々もお集まりくださいましたなかで、昼食会が行われました。国王陛下、そして王室の皆様が親しみを込めてお優しい笑顔でお迎えくださったこと、様々なお話をさせていただきましたこと、大変ありがたいことでした。

先代国王陛下にお招きいただいた日の晩には首相主催の晩餐会にもお招きいただき、様々に工夫を凝らした舞台で舞踊と音楽を鑑賞しつつ、楽しくお話をさせていただきました。

６月２日には「ブータンにおける日本週間２０１７」が開幕いたしました。柔道、空手のデモンストレーション、子どもたちによる手話をまじえた「花は咲く」の合唱、日本からこの日のために訪れた神楽を鑑賞した後、ユーフェルマ王女殿下を主賓にお迎えして、記念のレセプションがおこなわれました。この催しが、ブータンの人々が日本と日本の文化に親しむよい機会になりましたならば、幸いでございます。

その二日後、快晴のなか「ブータン花の博覧会」が開幕し、国王陛下をはじめ王族の方々と美しい花々にあふれた会場をまわり、庭園を鑑賞いたしました。昨年に引き続き造られた日本庭園は、日本の造園家の指導のもと、ブータンの人々が自国の植物や石を使って造られたもので、庭園を通じて国と国との交流を感じる時間をもつことができました。

ブータンの伝統や文化にふれる機会もありました。ティンプーでは、民俗伝統博物館、国立弓技場、織物博物館およびロイヤル織物アカデミー、伝統美術工芸学院、パロでは、キチュ・ラカン、伝統的な農家、パロ・ゾン、国立博物館、タクツァン寺院を訪れ、音楽や舞踊を鑑賞し、５歳の時にブータン王国を訪問した両親から聞いて以来、思い描いてきたブータンの魅力を実際に味わうことができました。

また、ブータンの農業発展に大きく貢献された西岡京治氏（ダショー西岡）の業績にもふれることができました。パロの農業機械公社にはダショー西岡についての展示や写真がありました。また、訪問した農家の人々、そして各所でお会いした多くのブータン人の心の中に、ダショー西岡への思いと感謝が今も強くあることを感じました。「西岡チョルテン」の前では、ブータンの僧侶や農林省関係者、ブータン各地域の農民の代表による特別な儀式も行われました。

今回、青年海外協力隊員、シニアボランティア、ＪＩＣＡ専門家等のＪＩＣＡ関係者、そして在留邦人など、両国間の友好関係に寄与されている方々とお話しをする機会もあり、皆様が携わっておられる種々の取り組みやブータンでの生活について伺うことができました。このように両国の友好関係の発展を支えてこられた方々に、心より敬意を表したく思います。

７日間の滞在は、あっという間に過ぎました。毎日のように眺めていた深い緑が、魅力的な伝統と文化が、ブータンの人々の優しさとあたたかな心、そして笑顔が、今も私の心に強く残っております。今後とも、日本とブータンが寄り添える関係でありますよう、そして両国の友好親善関係がますます深まりますよう願っております。

（宮内庁発表より）

ブータンの民話について

ブータンミュージアム　栗原　哲朗

ブータンでは識字率が低かったころ、口承文学（ゾンカ語でいうカジュー）が世代間の伝達手段として強く息づいており、今のようにテレビや映画などがなかったころは、民話、寓話、伝説などのお話の集いにこどもだけでなく大人もあつまって、語り手の言葉に耳を傾けました。

お話の集いは、語り手から聞き手への一方的なコミュニケーションではなく、両者の間に気持ちの交流がなければなりません。お話の展開とともに、聞き手の誰かが合いの手を入れなければなりません。ブムタン語（中央ブータンの言語）なら、「アエー（で？）」とか、「ツェニ（それで？）」、ゾンカ語（西ブータンの言語）なら、「テレー（それから？）」などと誰かが言うのです。すると、ブムタン語ならば、語り手は、「ツェニ、イ、イー（すると）」、ゾンカ語なら、「テレ―、エ、エ―（それから）」などと大げさに受けて、話を続けるのです。精霊にお話を盗まれないよう、やりとりを続けるのです。お話を真剣に聞いていることがはっきりしているなら、精霊にお話を盗みとられることはないのです。

ところで、ブータンのお話は、どれも「タンポー、ティンポー（むかし、むかし）」で始まるのです。昔の程度は、この両句の長短で表されます。普通に「むかし、むかし」は、「タンポー、ティンポー」と言い、「むかーし、むかし、そのまたむかーし」と言う場合は、「タンポー、オー、オー、ティンポー、オー、オー」といった具合です。タンポー、ティンポーはれっきとした二人の人物で、通常、この２人にまつわる物語でお話の会は締めくくられるそうです。

そのお話のあらすじは以下の通りです。むかしむかしの大昔から、人が物語と言うものを語り始めた時から、タンポ―とティポーは追いかけっこをしており、タンポ―は絶対にティポーに追い付かれてはいけないのです。追いつかれたら世界中の物語と言う物語はすべて終わってしまうのです。タンポ―がティンポーの前にいる限り、物語は永久に世代から世代への語り継がれるのです。この２人の物語とは、一言で言えば、これまでに１度だ）け、タンポ―が追いつかれそうになったが、危機一髪、その難を逃れ、物語が幸い今も続いているというものです。

以上は、「ブータンの民話と伝説」（クンサン・チョデン著、今枝由郎、小出喜代子訳　白水社）を引用、または参考にしています。

ところで、私も小さな子供のころ、毎晩、寝る前などに母方の祖母（おばば）からよく昔話を聞かされたものです。というか私の方がねだったのでしょうね。舌切雀、もも太郎、一寸法師、花咲か爺など、毎晩のように聞きながら、知らぬ間に気持ちよく眠りについていたように思います。おばばは、「むかーし、むかーし、あるところに･･･」といった調子でゆったりとした語り口で語るのです。面白かったのは、子供が飽きないように、毎回一部を脚色して話に変化をもたせるのです。すると、私は、「あれ、昨日と違うがのう。・・・でなかったの？」と質問したりしました。でも、おばばは、こどもをなだめすかしながら、いつも脚色した話を続けるのでした。それでいろんなバージョンを聞かされ、楽しかったものです。だから、後に私も親になった時、我が子に同じようなこと

をしているのに気付くと一人、おばばを懐かしく思い出していました。

まあ、私の子供時代（戦後の昭和２０年後半）には、そうした昔話を聞いたり、紙芝居で水あめをなめながら紙芝居を見るのが楽しみな時代でした。古き良き時代でした。「むかーし、むかーし、そのまた、むかーし」というのは、日本の場合は物語にはなっていませんが、言葉の響きがブータンのそれと似ていますね。英語は「ワンスアポンナタイム」でしょうから、ちょっと響きが違いますね。ブータンと日本は文化的にも何かいろいろな共通点を感じます。

ブータンミュージアムには、ブータンのこどもたちが幸福をテーマに書いてくれた絵が数十点あります。その中に、幸福を感じる時は、祖父母の話を聞くときということを描いている絵があります。多分、この子は、家で夕食後か就寝前などに、祖父母から昔話などを聞かせてもらっているのだろうなあ、と想像します。穏やかな子供たちの笑顔が目に浮かびます。

以下、ブータンの民話を一つ紹介します。

ブータンの民話 「３つの願い」

ハ村にウゲン・テンジンというおじいさんがいました。その昔、彼は裕福な商人でしたが、何度も商売に失敗し、今では貧乏でした。一方、幼馴染のジャンベルじいさんは、裕福で、大きな屋敷にすみ、大家族に囲まれ、それは幸せに暮らしていました。

あるとき、テンジンじいさんが、ジャンベルじいさんにこんなに裕福になれた理由を尋ねました。すると、ジャンベルじいさんは、「山の中腹にあるお寺に行って、アプ・チュンドユ（ハ村の守り神）にお祈りをしているだけだよ」と答えました。それだけで幸せになれるはずがないと思ったテンジンじいさんは、次にジャンベルじいさんがお寺に行く時、こっそり後をつけてみよう決心しました。

次の月初めに、ジャンベルじいさんはいつものようにお祈りに出かけました。テンジンじいさんは、気づかれないようこっそり後をつけて、様子をみていると、ジャンベルじいさんは、お寺に入ると仏殿（ラカン）に入り、アプ・チュンドユ像の前で線香をたき始めました。そして祈りを捧げ、白い絹の布（カタ）を像に捧げただけで帰りました。

そのあと、テンジンじいさんも、同じように仏殿に入りました。線香も白い布も持ち合わせていなかったので、ただ一心不乱にお祈りをしました。すると、目の前に農夫の姿をしたアプ・チュンドユが現れ、何でも望みを聞いてやろうと言われました。テンジンじいさんは、戸惑いながらもその言葉を信じ、丁重に望みをいいました。

「私は、また元のように、いや、それ以上に裕福になりたいのです」と。すると、アプ・チュンドユは、「よし、わかった。ではわしの言う通りにするのじゃ。いいな、次の満月の夜に、日の沈む方向の屋根に上り、線香をたき、なみなみ注いだチャン（米や麦から作った発酵酒）を足元に置き、祈りのための緑の旗を持って、和紙を待て」と。

そして、その日がやってきました。テンジンじいさんは屋根に上り、言われた通りに準備し、願い事も考えてアプ・チュンドユが出現するのを待ちました。すると、突然、雷鳴がとどろき、火を吹いている巨大な龍が現れました。驚いたテンジンじいさんは、準備した線香などを投げつけると、龍は「恐れるでない。わしはお前の望みをかなえに来たのじゃ。３つほど、望みを言うてみい」 しかし、慌てふためいたテンジンじいさんは、さっきまで考えていた願い事など思いだす余裕もなく、とっさに思い浮かんだ言葉を口走ってしまいました。

「ゾソイ！」 ゾソイとはブータン王国の言語「ゾンカ語」で「おしまい」と言う意味でした。それを聞いたアプ・チュンドユは、何も願い事がないのだと思い、たちまちどこへともなく消え失せてしまいました。こうして、テンジンじいさんは、裕福になれるせっかくのチャンスを逃してしまったのでした。

参考　ブータンの民話（クムス・K・カプール編著、林祥子訳　恒文社）

最近のクェンセルの記事から、その IV

ブータンミュージアム　奥村　彰二

ブータン腐敗防止委員会の活動

前回の「最近のクエンセルの記事から、その III」において、国際腐敗認知指数ランキングについて取り上げ、ブータン政府が 2015 年のデータによる現在のランキング順位 20 位から、2020 年までに 20 位まで上げることを目標に挙げていることを書いた。ブータンは、国家間で人々の幸福度を比較することには意味がないとしながらも、政治腐敗、社会的男女格差、報道の自由、幼児の死亡率等を国家間で比較するランキングには、高い関心を持っているばかりでなく、それらの順位を高めようと、それぞれに関わりのある政府機関が具体策を検討している。

ブータンで政治腐敗防止に関わる政府機関として、腐敗防止委員会（Anti-Corruption Commission）がある。これは腐敗防止法に基づいて、2006 年に設立された、常勤職員を 70 名近く抱えた政府機関である。その役割は、文字通り国内の政治･行政活動における不正や犯罪行為の監視･調査、関連する司法機関との連携活動、政治家、公務員、企業職員を含む国民全体の倫理観、誠実な正義感の確立である。

この委員会が関わる金融機関の不正について、2017 年 7 月 7 日に、「BDBL 職員による総計 5 億 7,600 万 Nu に上る不正容疑」という見出しで、詳細な記事が報告された。BDBL とは、Bhutan Development Bank Ltd.（ブータン開発銀行公社）の略称である。BDBL は、いなかの農民の小口から大口までのタームローンを含む金融サービス、産業、商業、農業においても一般ローンのサービス、すべての 205 のゲオにおける各種銀行サービスを行っている。

その銀行の中の一人が行った不正な金融処理についての報告が紙面で公表された。その記事全体は、非常に詳細で、その前半の一部だけを転記する。

2017 年 7 月 7 日　トップ記事

法務長官事務所（OAG）は、ティンプーにあるブータン開発銀行（BDBL）における 5 億 7,646.9 万 Nu にも達する着服と不正行為の疑いについての調査報告を調べている。

「我々は、その報告書を調査するために、2 人の弁護士を割り当てた」と OAG の主任検察官のキンレィ・テンジン氏は述べた。

腐敗防止委員会（ACC）は、BDBL のプロジェクト・オフィサーによる 2013 年から 2016 年までの間で、「預金超過引出し」（OD）とタームローンにおける不正な無承認増額に関する報告書を、6 月 22 日に OAG に届けた。ACC は、OAG に違法な行為に関わった 9 人の容疑者を告訴するよう勧めた。

ACC は調査で見つかった事実や証拠を調査した後、プロジェクト・オフィサーのペマ・ニドゥ氏が 55 人の顧客に、合わせて 5 億 7,646.9 万 Nu のローンへの増額を確定したことを報告をした。このプロジェクト・オフィサーは、クレジットや法的な事業部門の知識なしで、ローンや付随的な貸付金を増額するために管理システムに手を加えた。

ペマ・ニドゥ氏は、タームローンを増額する間に、支払いメモの中の 2 人の法的援助者の署名を偽造したことで告発されている。報告では、BDBL からのいろいろな営業上の命令がこのような違法な行為に至らせたと述べている。

ACC は、2013 年に別のプロジェクト・オフィサーが関係した同じようなケースを見つけた。このときの裁判所の判決は、将来従業員がこのような失敗をしない

ように、管理システムを見直し、改善することを指示したものであった。「しかし、BDBLの管理者は、システムを修正することなく、以前のやり方を続けた」と報告書で述べた。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
（以下の詳細な報告は省略）

腐敗防止委員会の役割を前に述べているが、上記のような政治腐敗を見つけて公表することが、真の目標ではないことは明らかで、国民全体の政治に対する正義感、高潔感を高めて、公務における倫理的な汚れを少なくすることがより重要な目的である。ブータンは1961年から国政を進める上で、5年毎に具体的な目標、それを5ヵ年（開発）計画と呼ばれるものを作って、その計画の基に政治が進められてきた。現在のものは11次5ヵ年計画で、2018年から第12次5ヵ年計画がスタートする。現在は12次計画の作成のための検討が、続けられている期間である。12次計画に反映されるべき、政治腐敗防止についての概要がまとまっていると8月23日に報道された。この内容の先頭の一部は以下の通りである。

2017年8月23日

腐敗防止委員会（ACC）は政治腐敗を減少するために、改訂された「国家保全と腐敗防止計画」（NIACS: national integrity and anti-corruption strategy）にしたがって、国内の異なった関係機関と協力して活動を進める。

政治腐敗を減らすことは、第12次計画を実行する上での16の国家重点領域（NKRA）の中の一つである。

改訂NIACSは、第12次計画における腐敗防止の徹底化を目指したものである。

匿名を望んだACCの職員は、2014年に作成したNIACSは、2013年からスタートした第11次計画に、反映させることはできなかったと述べている。「ACCは、強い監視と評価の枠組みを持たなかったし、省庁がその計画を実行したとしても、監視はできなかった」とその職員は述べた。

記者会見ではACCの委員会は、各省庁、憲法関連団体、軍隊、自治体部署、ゾンカク、トムデ、企業、市民社会組織（CSO）、金融機関と報道機関を含む16の部局の責任者に対する相談協議を1日かけて行い、その後に委員会が推薦や報告を受けると述べた。

政府機関における人事担当職員（HRO）と調達担当職員もその協議に参加する。

記者会見ではまた、リーダーの倫理的適正と政治意識は、全体の政治システムの中での倫理性と高潔さを具体化する上で重要であると述べられた。

ACCの委員長であるカルマ・ティンレィ氏は、その協議会は、調達行為と人事管理における高潔さ対策の改善を目的としていると述べた。「協議では、第12次計画を実行するための指標内容が提案されるであろう」

以下は省略。

政府機関の大学卒業認定基準の変更

ブータンの国会議員に立候補したり、またブータンの公務員試験を受ける際には、ブータン認定評議会（BAC）から出される大学の卒業の認定書が必要である。2016年からその認定書に、卒業した大学の教育の形態に、通常の大学の「正規」と、通信教育に類するものとしての「遠隔」という分類が明示されるようになった。それに応じてブータン選挙管理委員会や王立公務員会などが、「遠隔」に分類された大学からの卒業資格は、それぞれの委員会の有資格者とは認定しなくなった。国の機関でのこのような扱いが、民間企業にも影響して、採用のときや、既に働いている人に対しても、差別的な扱いをされるようになってきたという訴えが出されるようになった。

ブータンの国立大学と言える10前後のカレッジからなるブータン王立大学（RUB）の入学定員は2500名前後で、外国の奨学資金による学部留学生の数が、約200名ぐらい、ブータンの医療

関係、教育関係などの他の高等教育入学定員を加えて、約 2800 名前後が、教育省が管理する大学進学者である。ここで RUB 全体の入学定員は、2017 年 2 月 14 日に報道された高等教育の入学定員について記事がら引用している。2016 年 6 月 2 日に首相が、東部に 3 つの大学を新設することを説明する記者会見では、首相は RUB の毎年の入学者数を、約 3500 名と語っている。これは首相の記憶違いではないかと判断した。

高校の最終学年のクラス 12 の卒業生は、今年 1 万人を越え、さらに年々増加する傾向にある。RUB などの進学または外国政府等の奨学資金給付の留学者は、クラス 12 で受ける国家試験で決められ、その枠に入らなかった国内の大学進学希望者は、私費で外国の大学に留学せざるを得ない。その数は毎年 5000 名前後にも達すると見られている。平均所得額の少ないブータンの多くの家庭で、私費で外国の大学に、息子または娘を送り出すことは、重い負担である。もし、外国に行かなくても、自宅に居て通信教育とも言える教育を受けて、大学の卒業資格が与えられるならば、その方法を選ぶ若者が多く出てくるのは当然であろう。そのような大学から学位を過去に取得したり、現在在学している人が、通常の大学資格が得られないとなると、驚きと戸惑いを感じるのは当然であろう。

インド・ガントクのシッキム・マニバル大学（SMU）とその同系の大学の卒業生は、政府機関がこれらの大学の卒業資格を通常の大学の卒業資格とは認めないことに抗議している。このことを今年の 8 月 4 日に、クエンセルは取材しているが、その記事の前半は以下の通りである。

2017 年 8 月 4 日　トップ記事

ブータン公務員試験（BCSE）と 3 次国会議員選挙が近づいて、ガントクのシッキム・マニパル大学（SMU）系の卒業生の懸念のレベルがピークに達した。

卒業生はツェリン・トブゲィ首相（PM）とノルブ・ウォンチュク教育大臣とブータン認定評議会（BAC）に対して、学位証明の認定について訴えた。

卒業生たちは、当局者から受けた応答は落胆させるものであったとクエンセルに話した。

「今年の始め、新聞発表の集会で PM が、我々の問題を考えたいと言った時に、我々は大きな期待を持った。しかし、PM は今や彼の立場を変えてしまった」と SMU の卒業生ソナム・ジャムツォさんは言った。

ソナム・ジャムツォさんは、カリンポンの BB・プラダン・マネッジメント・カレッジを 2010 年に卒業した。

「我々が会ったすべての当局者は、同情の意思を表した。しかし、誰も我々の問題を解決しようとはしなかった。彼らは責任を次々と他の部局に回した」とソナム・ジャムツォさんは言った。

ツェリン・トブゲィ首相は、4 月 14 日に新聞記者との会談で、政府は SMU から取得した学位を認めることに問題はないと述べた。

SMU からの数百人の卒業生は、その大学が学位の証明書における教育形態として、2016 年から「遠隔教育（Distance Education）」として示されていることに、驚かされた。王立公務員委員会と選挙管理委員会は、遠隔教育の学位を認めていない。

この問題に影響されているのは、カリンポンとシッキムにあるカレッジからの卒業生だけではない。

ブータンの学生が卒業するインドの他の州の多くの大学も、卒業生によれば、ガントク流の大学に属している。

キンザン・ティンレィさんは、2010 年にシロンにあるシックス・シグマ・エデュコム・カレッジを卒業したが、これまでに 5,000 人のブータン人が、SMU と同じ系列のカレッジから卒業している、と述べた。

影響のある卒業生は、閉じたフェースブックのチャットグループを形成し、400 名ぐらいのメンバー数になっていると彼は述べた。「SMU の卒業生とその両親たちは当惑し、心配している」と彼は述べた。

（以下省略）

DNT は首相に辞任を要求

DNT とは、国民議会の野党の一つであるドゥク・ネァムル・ツォグパ党であり、党首はタンディ・ドルジ氏である。最終的に、政府は税制に関して憲法違反を犯したとして、高等裁判所に告訴した。

2017 年 6 月 19 日　トップ記事

憲法に違反したとして政府を告訴すると主張

政府を告訴する用意があるとを言いながら、ドゥク・ネァムル・ツォグパ党（DNT）は、与党が憲法に違反したとして、ツェリン・トブゲィ首相とナムゲィ・ドルジ財務大臣が辞任するよう要求した。

DNT は、国民のより大きな関心の中で、若い民主主義の未来のために、政府は憲法を弄んで、誤った優先政策を執ってはならないと述べた。

「憲法はすべての法律の母であり、国王からの神聖な贈り物である。我々はしっかり憲法を守る立場にいる。必要なら我々は政府を法廷に連れて行く用意がある」と、6 月 16 日にプレス発表で、その党は述べた。

DNT の党首であるタンディ・ドルジ氏は、彼の党は物事の現実の姿を注視し、もし党が政府の修正案に満足しないならば、政府を告発する積もりであると述べた。

「必要ならば、政府が憲法に準じていることを確認するために、我々は、政府を裁判所に引き出すであろう」と彼は言った。「我々は、政府が意識的に憲法に違反したことを、100 パーセント確信している。これは重大な問題である」

彼は付け加えて、政府は議会の承認なしに、財政優遇策を乱用したと述べた。2015 年の 12 月に、以前の政府によって民間企業に認められた財政優遇策が終了した後も、現在の政府は、議会の承認することなく、2016 年の 1 月 1 日から同じことを継続させた。

民間企業はそれらが受けた税の優遇に対して、払戻しをすべきか？

「それは民間企業の誤りではなく、政府の責任である」とタンディ・ドルジ博士は述べた。

もし過去の前例に従うのであれば、民間企業は、国庫に返金する必要がある。2011 年の歴史的な最高裁の判例に従って。政府は議会の承認なしで課した車両税の増額の結果として、集めた余分の税金を払戻さなければならなかった。

ナムゲィ・ドルジ財務大臣は、DNT の見解を肯定的に受取り、このような議論は民主主義には良いことであると述べた。

（以下省略）

これに対して政府側も、6 月 24 日に、「政府は財政優遇策についての訴えを退ける」と言う見出しで、首相は野党からの訴えを真っ向から反論していることを載せている。

2017 年 6 月 24 日　トップ記事

野党と DNT が政府を告発することに反論

ツェリン・トブゲィ首相は、政府が議会の承認なしに、2016 年 1 月、民間企業に財政的優遇策（Fiscal Incentives）を適用したことで憲法違反を犯したという主張を退けた。

昨日ティンプーで行われた記者会見の集会において、首相は、政府が認めた財政的優遇策は、法的にも、判例からも合法であり、憲法にも合致したものであると述べた。理由：税制の変更と財政的優遇を認めることは、全く異なった事象である。

法律と 2011 年の最初の憲法訴訟の判決に対する政府の解釈を説明して、国会のみが税を課したり改訂することができると、首相は述べた。また、財政的優遇を与えるのは、政府の特権であると述べた。

もし政府の主張が正しければ、財政優遇策として見過ごされてきた税の改善についての疑問は起こらないであろう。

ドゥク・ニァムル・ツォクパ党（DNT）は財政優遇策は憲法違反であると主張し、一方、国家評議員は国

会の承認なしで見過ごされた税は、徴収されるべきであるとした。

「最高裁判所は、税率の変更と新たな税の課税は議会を通さなければならないということを、正に明確にした」と首相は言った。

（以下省略）

その後、7 月 1 日には、「DNT 首相に要求：退陣または法律の直視を」というタイトルで、DNT 党首からの主張が掲載され、最終的に、8 月 18 日に、政府を高等裁判所に告訴した。

速報：DNT が政府を告訴

2017 年 8 月 18 日　トップ記事

DNT が、政府の憲法違反となる税制交代に関する疑惑で、高等裁判所に訴訟を起こした。「DNT は政府が非合法的で、憲法違反である税制交代を行ったとする判決を下すことを、裁判所に要求するために、矯正力のある手続きに踏込んだ。政府は憲法違反を犯してきた」と記者発表で DNT は述べている。

各種の公聴会で裁判所の関係者は、この訴訟を精査すると述べた。

アジアの村を歩く

１７　祈りの島　スリランカ
二つの市場

写真・文　松田宗一
（写真家・福井県大野市在住）

魚、野菜は新鮮さが売り物
生の売り物がそのまま並ぶ
値札を見た記憶はなく
相対の取引は、売り手に笑顔
なぜか男が多いトリンコマリー市場
野外の掛け合いは、キャンディ市場

「写真を撮るなら仕事をするよ」魚を捌く男は、包丁を握った

男の多い市場で一輪の花　爽やかな母娘に出会った

バナナ、調味料、野菜

初心者には

どれを選べばいい、

どこからとればいい

値段は？　わからないことだらけ

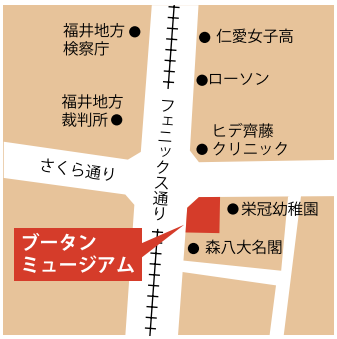
編集後記

みなさん、今年の夏はいかがでしたか。何か変な夏でしたね。台風が日本各地で洪水をもたらしたり、東京では日照時間が観測史上、最短だったり・・・　福井では、８月中旬の台風通過後から秋の気配をひしひしと感じました。幸い、８月上旬に来福したブータンからの地方行政研修団一行１２名は、天候には恵まれました。福井の蒸し暑さに驚いたようです。でも、福井市中心市街地は、３日間のフェニックス夏祭りの真っ最中で、花火や民謡、よさこいなど大いに楽しめて嬉しかったようです。

さて、天高く馬肥ゆる秋を迎えますが、福井の平野では、長年にわたって開発された福井が誇るブランド米「いちほまれ」の初収穫と初出荷に大きな期待がかかっています。おいしいお米が食べれることは、日本人にとっては特に大きな幸せですからね。

ブータンミュージアム　栗原　哲朗

【発行日】2017年１０月１日
【発行元】
特例認定特定非営利活動法人 **幸福の国**
〒910-0005 福井県福井市大手 3-15-12
ブータンミュージアム内
TEL.0776-22-0011 FAX.0776-22-0010
ホームページ http://bhutan-npo.asia/
Ｅメール info@bhutan-npo.asia
ブータンミュージアム
〔定休日〕毎週月曜日〔開館時間〕ＡＭ11：00～ＰＭ5：00



ＪＲ福井駅から徒歩約１０分